

スポーツの教育, 文化, 科学の担い手育成策

阿江通良

体育科学系教授

体育・スポーツをめぐる環境と体育専門学群

ニュース番組のキャスターも「さあ、次はスポーツです」と言うとき、その表情が和らぐ。暗いニュースが多い昨今であるが、スポーツはわが国で明るい話題を提供し、多くを元気づける数少ないものの1つである。古くは、敗戦で自信を失い、暗かった日本人を「フジヤマのトビウオ」古橋選手（元日本オリンピック委員会会長）が水泳の世界記録を次々と樹立して元気づけたことはよく知られている。このようにスポーツは人間を活性化する力を持っている。また、われわれの生活においても健康やスポーツなどの話題が多くなり、スポーツの浸透力にはすさまじいものがある。そして体育・スポーツの広がりによって体育の教員あるいは指導者としてのみでなく、体育・スポーツを熟知した多様な分野で活躍できる人材を養成することが要求されてい

る。筑波大学の体育系への期待は大きい。外部評価委員であった加賀谷先生は「体育・スポーツの研究拠点」を筑波に期待し、勝田先生（前体育専門学群長）は最終講義において「——— 筑波の体育は輝き続けてほしい。」とわれわれを激励された。このような期待に答えられる、体育・スポーツ教育、スポーツ競技、スポーツ文化、体育・スポーツ科学の担い手を育成する体育専門学群の教育はどうあるべきかを考えてみた。

まだまだ多くの課題あり

体育専門学群の教育課程は、これまでの数度の改革をへて、平成9年に大きく改革された。この改革では体育学、運動学、健康体力学という体育・スポーツ科学の専門学領域に着目した卒業研究領域に加え、健康・スポーツ教育、健康・スポーツマネジメント、コーチングという職業に対応した主専攻を設けたことであ

る。そして、新教育課程での最初の卒業生に対する調査（平成12年度体育専門学群の新カリキュラムに関する調査報告）では、4年生の84%のものが満足度3以上と回答している。一方、全国各地の先輩諸氏、特に教職関係の先輩からは、「筑波の学生は専門のスポーツはうまいが、専門以外の実技がへたで、指導ができない」などの指摘を受けている。またアンケート調査では「興味のもてない授業が多い」、「実技の授業数が少ない」、「運動の指導法の授業が少ない」などの指摘が多い。また、1年生の第3学期の実技の授業で「体専に入ってきて、予想と大きく違ったと思うもの、期待はずれであったと思うもの」を問うたところ、ほぼ全員が挙手したという話を聞いた。職業対応が売り物の新教育課程でも、先述した環境の激変に対して学生、さらには教育目標と実際の職域とのギャップ、社会や学生の多様なニーズへの対応など、問題は山積している。

以下は改善のための提案である。

提案1：GL教育を徹底する

GL教育（Gentleman + Lady教育）は、現在の日本で最も忘れられてきたことであろう。同様に、これなくしては、体育専門学群の教育のすべてが崩れ去ること

になる。東海大学の山下教授（ロサンジェルスオリンピック柔道金メダリスト）はあるTV番組のなかで、現役時代そして監督時代には勝つことのみを目標に柔道をしてきたが、これからは人間形成を第一とした柔道を目指し、指導したいと述べている。また、サッカーの奥寺氏（日本人初のドイツプロサッカー選手）は、「ドイツでは、スポーツマンはグラウンドを離れたら、第一級の市民であるように教えられる」と語っている。学生時代にある先生から「スポーツは紳士が野蛮にやるものである」と言われたことを思い出す。「スポーツの場を離れたら、野蛮人」のようなスポーツパーソンが多いようでは、スポーツの存在意義はなくなるであろう。日本の社会にスポーツが文化として受け入れられ、日本独自のスポーツ文化が成熟するためには、その担い手は多くから尊敬される人間であらねばならない。親が「あのような人になってもらいたい」と思うようなスポーツパーソン（競技者という意味だけでなく、スポーツに関わる人）がどのくらい輩出できるかで、本学群の存在価値が決まると言っても過言ではない。GL教育は容易ではなく、道も険しいし、そのようなカリキュラムをつくることも一朝一夕にはできないであろう。在学中

の公私にわたるすべての局面で構成員全員が常に意識して取り組む必要があるが、費やす時間が多く、身心ともに負荷がかかり、場合によっては臨界状態に近くなる実習活動や部活動では特に効果があると思われる。

提案2：基礎力をがっちり身につけさせる

ここでいう体育・スポーツに関する基礎力とは、実技能力（スポーツ万能を目指す）、体育・スポーツに関する基礎的知識力、論理的な思考力、そして語学力（特に、英語力）である。

実技能力の向上に関しては、先述したように学内外からの期待が大きい。しかし、時間割、教官の負担、さらにどの種目を学ばせるかという課題がある。どの種目が基礎となるかの科学的根拠はまだない。現在本学群ではかなりの実技の理論と実習が開講されているが、実際にはこのうちほんの数種目を学習するだけである。これは、教職免許の実技に関する規定が緩和されたこと、教官の負担などを考慮したためである。そのため、先述したような不満が生じたものと思われる。解決法の1つは、実技検定制度をつくり到達目標を示して、検定に合格すれば、実技の受講は免除するようなシステムを導入することである。そして、実技

検定に合格した学生は指導法に関する講義や実技を受講するようにして、実技指導能力を身につけるようにする。このような実技検定制度は本学教官の実力をもってすれば、実現可能である。さらにこれらの実施は、全国の体育系大学の実技教育のあり方などに一石を投じることになると思われる。

体育専門学群では、非常に多くの授業科目が開設されている。人文系の科目から理系の科目、そして運動指導法、実技など多岐にわたるが、それでも昨今のスポーツの広がり、学生の多様化には対応できなくなっているのが現状である。そこで、体育・スポーツ科学の基礎となる科目を徹底的に充実させるとともに、専門科目の選択を多くし、また一部自由科目への読み替え、他学群の授業の受講もできるようにする。特に、専門基礎科目に関しては、明確な到達目標を設定し、内容を精選し、評価を厳正に行う必要がある。また、基礎科目といえ、1、2年生で履修させるというイメージがあるが、実技や問題解決型の授業を1、2年生で多く行って、学生の体育・スポーツに対する意欲や興味を喚起し持続させ、ある程度意義がわかったところで基礎的な、あるいはより学術的色彩の濃い科目を履修させることも効果があがるのでは

ないかと思われる。いずれにしろ、基礎は少なくともがっちり行い、その他は学生の興味関心、将来の設計などに応じて履修させるといように変更すべきであろう。

語学力については、外国語センターの協力を得るとともに、外国人教師による授業、英語による授業などで刺激を与えることが効果的であろう。現状は恥ずかしい状況であるが、やればかなりできるはずである。ただ、トレーニングと同じく、漸増性の原則と個別性の原則にしたがって教育する必要があるが。

提案3：実践力（問題発見解決力）を徹底して鍛える

体育・スポーツにおける問題発見解決力は多岐にわたるが、いずれの場合も、学んだことや経験を動員しなければ、課題を解決することはできない。このような運動に関する問題発見解決力は、体育・スポーツの場合には、自己の向上が合理的な過程を通して行われたという経験や感動をもたせ、また他の事例から学ぶことによって身につけられると考えられる。

最近では、問題解決型を意図した授業が様々なところで行われている。しかし、入学から卒業までの4年間という長

期にわたって、定期的な測定や実践記録を学生に行わせ、学んだ知識を応用しながら、自己の状況を把握し、適切な指導を受けて改善法を見出し、トレーニングや練習をするという試みは行われていない。このような長期の過程を経ることによって、問題発見解決能力のみでなく、指導者としての心構えなどが身につくと考えられる。また、「なぜ」そうなるのかななどの疑問をもち、科学的な探究心が刺激され、研究者としての道を歩むものが出てくることも期待される。このような自分を被験者とした問題解決の過程は、部活動などでは自然発生的に行われ効果を挙げている場合もあるが、学群の教育として取り組む必要がある。学生たちは、向上の見通しがもて、進歩の状況を把握できれば、必ず自信をもち、意欲的に取り組むようになる。このような教育を受けることによってスポーツ文化や体育・スポーツ科学の担い手となる気概や志が育まれるのである。

もうすぐ、ごまかしは効かなくなる。本学群に入学してくる学生は非常に優秀である。とすると、教官の意欲と活性化がすべてを決定することになる。

(あえみちよし
スポーツバイオメカニクス専攻)